繪源氏物語

恋の八

宮内省圖書寮藏書

石曜文庫

三十八

○河　並巻名大くさの秋といふしとそうのうとゆうとそうとさとのあう
○花　以詞并哥為巻名源氏五十歳横笛の次年也竪の並也
○弄　源氏五十歳夏　り秋まてのゆ也夕霧廿歳

○夏ゝろ蓮の　細　六条院の池に蓮也
○入道のひめ宮　細　廿三宮也
○ゆちねつゝと　盃　廿三宮のゆちねこうひのやうなるやゝ
○世ゝひい大臣の　細　持佛とはせんれんもいまゝ念誦堂ハ出来さる也六条院ゝて源氏の悉皆
ゝ

○ゝゝの　盃　幡也　花蔓也

○花つゝ　の　河　花机覆縑文紋目染也
應和元年五月十八日に記曰經櫃各置花足下
机加花文綾覆二色綾地歟
○ゆゝの　巴紋　くり染也りのこれと織物ゝ

○ろうの帳はくひとりありて花の帳の四面の帷子とあをそうしろのうすよ法華の異陀羅と
りをそうふ常の法會ハ爰也
幷いまゝ持佛堂ハそれと女三宮の帳臺と
持佛堂よりろうひろ之向云夜のの帳ハやう如何
一答ろうの帳常の長臺也夜わろよりて夜
のの帳と云也四方よりぬハ帷子とれろう

○ちゝしさ花の色と　幷　蓮華ろうし

○百ゆのえろ香　河百歩香
幷　昔ハ唐の方と用ゆ
○あろ佛をしのかろ河阿弥陀脇士菩薩
觀音勢至也　唐太祖大武皇帝　乃太祖元皇帝
元貞皇后造　栴檀等身像三軀　延喜式　盧
舍那　幷脇侍菩薩白檀像一龕
花　觀經云無量壽佛立空中觀世音大勢至是
二大士侍立左右ろ
○あろろく　河　閻伽具　閻伽ハ梵語也
○さハやうよ　或抄　一ハあろうろ

○ろうろうの　河荷葉方　蓮花ろうろて此方とあせ
らろ　幷　是ハ日本の方しと青ろ白ろ紫
の蓮とろのて是ハ花と作てあろ皿よ入てとも也
今も有ろ也人よろひろ
○ろうちとろう　河　密とろめて抹香のとくよろう
ろうをかろくをハかろくしろ也
孟　密ハ蜂の氣ろれハ佛の燒香よ依て除之也
○ひろろりろよ　或抄　薫衣香荷葉ひろうろ
○ろうろうの　孟女三宮の持經とハ源氏のあそ(ろう)
花　天暦九年正月四日村上天皇乃母后被供養
震筆法華經有八講
○これとそろよ　幷　女宮と源氏と此世のちうう
うとろうしろうろう

○さそハあろ經　或抄　これも源氏のあそハとう

○かんやの人　或抄　紙屋川にて紙をすきし也　かんやかみといふ

○はしとみ給ふ　弄　めもかゝやくよし也

○けかけたる　河　計　又境　金　或抄　金泥にて罫を引し也

かみハもろくて朝夕の御てならし
にもいかゞとてかみやの人をめし
てことにおほせごとたまひて
こゝろことにきよらにすかせ給
へるにこの春のころほひより御心
とゞめていそぎかゝせ給へるかひ
ありてはしを見給人〳〵めもかゝや
きまどひ給ふけかけたるこがね
のすぢよりもすみつきのうへに
かゝやくさまなどもいとなんめづ
らかなりける軸へうし箱のさまなど
いへばさらなりかしこれハ

○ぢんのまろくの河　花足机
細　源氏の自筆の経ハ此机に置也其外のハ導師の
まへにおくべし　弄　花机表にてそやうあり
○佛のおなじ花　帳臺　河　帳臺の上に佛と同しく経の
机をかざらるべし　河海の自余の説ハ皆誤也下に記
におなじといへるハ佛の御しつらひとおなじ帳臺
に佛経を安置せられたりし分明也
○ぎやうがう　河　行香事見賢愚経
或抄　僧衆の手中に香をひねりいる也
○にしのひさし　孟　源氏の女三宮おはしますとのひさし也
○あつげ　孟　暑氣也
○女房五六十人ばかり　或抄　そのやうに四つのき衣ハ
あつき也

ぢんのまろくのけそくのつくゑにすへて
ほとけの御おなじちやうだいのうへに
かざらせ給へりだうかざりはてゝ
講師まうのぼりぎやうがうの
人〳〵まいりつどひ給へば院も
あなたに出給ふとてみやのおはし
ますにしのひさしにのぞき給へ
ればせばきこゝちするかりの御
しつらひにところせくあつげなる
までこと〳〵しくさうぞきたる
女房五六十人ばかりつどひたり
きたのひさしのすのこまでわらべ

○わつさちうせハ 巴揪 空焼とわつさうる躰也
人のさしへ也
○さうより給て 盃 源氏のさうよりてかくてさき
まろハそれとまくいつくより白ひろうせんのやう
よきる物なること 無念義としへこと
○花ひよりもなる 取揪 勝也
○うつせらの 細 講説也人々ひそかにて聴
聞あるへしとなり
○おわりをきこめて 巴揪 鳴也
○例のとの女房らね 弄 廿三宮の乃おれ人々の女と云

なぐハさ陶ふみびらくぞも消さき
してきづてきまでおなぎちく
せバさしられひて源氏羽それふく
いらづくのなづかどしおりひらう
とあふれまれ。翁どのまねわ
もそふゆかうらあらんハお宮
きるぎさらうか一せらの御うち。
おかくこのきかりをしづめそのぞる
あおくうろもきうくつぎさと
それかうづりるきまあのをと
うひ人のきうひしつめてまた
るぶらうど例の御つらぬなりう

○はゆ給けり 弄 廿物なれまらに給へし
○若君らうりけ 盃 薫也こて へ出生わさハり
うんわとなること 源氏の羽也
○ふかおて宮なと 細 まへハ人々の用意としく
こより八廿三宮へ聴中有へきよしもとかへさり
せ給也
○おきしとゆうり 弄 廿三宮のおきしと佛よゆうり達

人々との御さとヘ給。わや
人ぞよそれ給くいしちやく
おりげそ御まふし給ひりて
ぎらくうりりんとしうきうし
それまさらどの給まくの泊
きらじもなりもふそてずす
けうきてまんでいけまわ給。
しづかそこやも御のころ知
給ぐさちうくどきさし尓せ
給ひてあられまゐおまへとゆづ
アとかくれかげの月は八ひ。尺
やすくあふもまゐぐよかうるあ

○[illegible]も巴御前 源氏にて弁老[illegible]ろよ世三宮し如此のよをしハ物ものよりさしと

○この花の中の河一ニ池中花盡満花ニ惣是往生人各留半座乗花葉待我宿浮同行人五會讃

○[illegible]と奇 源氏也 孟物ヲ墓と琴ハ来世のよろ[illegible]ハよろ[illegible]の別ハよろ[illegible]ニ巴御前 孟のよろ[illegible]ハこ[illegible]心也[illegible]

○[illegible]扇 細 尼の扇也

○[illegible]奇 芝宮也 細 源氏の心ハ世[illegible]
弄 私云[illegible]とハ[illegible]
源氏ハ我と一蓮よハ住[illegible]心可然ヲ

○例の尼[illegible] 孟 月卿雲客ハ[illegible]ハ親王も悉[illegible]

○[illegible] 孟 捧物 伊勢物語ヲ山もと[illegible]
堂の[illegible]

○七僧の[illegible] 河七僧法眼 講師 讀師 呪願 三礼 唄 散花 堂達 謂之七僧 御記日天徳四年六月九日丁巳 此月理子内親王家歌 円城寺修四十九日 法事其儀経具及七僧法眼料物ハ預給 令調備使花近次将伊渉誦経布施調布三百端 又着侍臣五六人定行香役

○あや[illegible] 河 粧 装束也

○[illegible]ハ弄[illegible]ハ也

○ひろうう 細 草子地也

○ことの心を 孟 先講座よりのりて表白とりむこ

○世世をとれ 孟 女三宮さうくまりまとりくう

よりこうひのる也

○こ今の世よ 巴扱 講師のる也

○ゆさきさきさ 河 寛舌 弁舌のる也

細 廣大弁舌也

○これりて 細 内このうち

るでくぎぎとめでくりとや

ひろうう花の山の尺とし 花 山 誦経の使也 内裏より

を院うもうてうう也

孟 山の尺とハ朱雀院也 山 誦経使とて羽林

を立る也

○とひろうきろ 巴扱 加注也 六条院の胃意

よりうくのうう也

○うくうとりり 細 省略也

夕の寺よ 河 蒼茫霧雨之暮初寒汀鷺立

重疊 烟嵐之断処晩寺僧房

花 衆僧とと山布施様物をと 持参てとの

寺よをさ布をきまてつこをきる也 仏とうまる

とえ 河よつさて夕の寺とうきりいとりりう

ひじて山 宮 河 蒼茫霧雨之暮初寒汀鷺立

重疊 烟嵐之断処晩寺僧房

花 衆僧とと山布施様物をと 持参てとの

寺よをさ布をきまてつこをきる也 仏とうまる

とえ 河よつさて夕の寺とうきりいとりりう

ぎりとうとりりう 細 省略也

○ぎりとうとりりう 細 省略也

○ぎりとうとりりう 細 省略也

○ぎりとうとりりう 細 省略也

○今しも 細 まこと人のよりて心よいわりし
○院の尺しハ花山の尺しの事也 中宮の御かたの事也
しハ廿三宮よゆづり所三条宮よゆづり所へく与所也
孟 花鳥ニ朱雀の御心とあり 如何 是ハ朱雀院の御跡
あきりめもと源氏の羽也
○源氏の事まそ 或抄 終よハ此三条宮よゆづり所を
きハやくゆづり所ありうんとく
○ゆうくまそハ 也抄 源氏の御在世の事ハ心さし
をもうんとく
○をさまんよ 或抄 三条宮よゆづり所てハとこうり
めぐしとく
○ありそね世 河 古今 ありそね命よおつるの
かとえりうさるの名をくうめそうともうか

かくりさかり海しもんぐらうき
わかうきひてちりのかうし
づきゆうん所のおんのみかどハ
このれそふぶんのやまに俗かれ
こまひうんもつみのしそれ
めやもとりあべくやすみ所でも
まうそそれいめがつのかるべし
所ちきむ今もすりゆうもけり海
ちんしてもとてられ人におゐた
がひあづしぜよわりまえて世
いくぐわるまずぜれどあすい
きりざりのころつぎしぞた

○このおやとも 弄 三条宮のうす廿三宮のさうり所まで
かさ不也 或抄ニ源氏の又くつりくく人所也
○ところの 河 令諸国与田部屯倉 日本紀
○又ともそろく 孟 蔵也
○あるさ名の 或抄 朱雀院より廿三宮へまか
せられ所てうりのとも也

うるひちそぶしきこて所で
みのらやをもいてこまうよさよう
まつらし世所に海のものどもと
ところの流さう御まきさみだれ
まそまつかぬぐもぞかくしき
さ海のいかの三条のさやの法花
よ物さ卯今さ世る海の父もそ
ちつさ世所てさ海くの流たち
りのどもおんの御そろぶんよ
くずりかく海うり所つるまで
わするさ海のものいころみのまよ
よそらびをとし海るよいかれ

○すゞむしのあそび　并　源氏の遊也

○そのころの　并　女三宮のさうしにさいてまつるへ
こまかにの也
野よりうつさせ　孟　虫をとらせ給ふ事のある也

○このかたは　或抄　出家の住居のやうなる事也

○御弟子ゝ　細　尼になる也

○かのとものある人　孟　世やうきわたる人々は勿論也さと
ちさきとふさきの人も御弟子になるなる也

うちにも世にもあかしの御
くづきとての女房のことたち。
うとましものにてたゞ、ひとへにこそ
ことなれハうひうひしさハのとざ
つくろはせ給ひひろの西
のわたどのゝまへの中のへいの
乃東のきはをおしなべて野
につくらせ給へり。あかのたな
などして、そのかたにしなさ
せ給へる御しつらひなどいと
なまめきたり。御でしども
あるかぎりも、御めのとふる人

○さうぞくも　或抄　女三宮の出家の時分我ちくと
めかしひて尼になりぬとをと源氏ゝ付てとめ
給て行末までも出家をつとめへき心なるものを
出て十人あまり尼になりぬる也

○こゝろあるへき人　孟　源氏のとかめ給ふ一人のなさけの
あさいひきとゝめたまふもの心むつかしき心也

○うちつとひて　孟　尼になりて也

どものめのとそのほかわかきさかり
のもこゝろさだまりさるかたに
すてよをつくしはべるべきかぎりハ、
えらみてなんなさせ給ふ。
そのきほひにはわれもわれもと
きそひけれど、とのゝきみ
きこしめしてあるまじきこと
なり。こゝろならぬ人まじりぬれば
かたへの人くるしう、あは
つけききこえいでくるわざなり
といさめ給ひて十余人ばかりの程
ぞかたちかへてはさぶらふ。

○[illegible] 五水 源氏廿三宮(西出)也

○[illegible] 細 源氏也

○[illegible]の心ハ 細 廿三宮の四し

○[illegible] 孟 柏木のゆとを源氏のゆく[illegible]

ゆとを廿三宮ゆく[illegible]

[illegible]ハ 或抄 源氏の心ハ中[illegible]

○いてゆしなし 或抄 世くさのとのゐんの心

[illegible]

[illegible]

○人[illegible] 孟 源氏の四出るさ不[illegible]

[illegible]を遠而[illegible]

或抄 三条宮のゆ也

○十五夜の月 細 生[illegible]

とハ又別也

[illegible]

○かはらけ 盃 花皿也 世抄閼伽の器也
○例のもの 盃 源氏の女三宮へ也
○ひとの音に 或抄 源氏の詞也
○わらはの大臣 河 阿弥陀大咒
○秋の虫の声 細 源氏の詞也

かはらけかはらけのそとに水乃
まじはるきこゆるなかに
うかひとなるそのことはへる。
いともあはれなるにほひのまお
うけましてむしのこゑとことに
こゑそゆかしくなるをきけは
むかしのことならひをまちかき
乃ちをいとこひしくおもふ
きくことにこゑくちすさみ
よすからのよるなかとなる
やよひけ秋のむしの思ひを
ことさけよ松むしのなくこれ

○中宮の 花 秋好中宮の事也
細 あきこのむ中宮なるへし
○ちりくるさ 希 野なるしらうなるなりて
まつちかくなへきことわりなりと
○名にはうひて 盃 松虫といふて命の長き
へきとなり
○人さかね 世抄 松虫は人をまつと鳴也
○ひとへなき心 細 うちとけ心なき虫とく人をまつ
とくさき心也 世抄 廿三宮の心を下心にて人を
○今めかしき 万泉 人ほくえくしきかと

ふりてけふのなかけなふ
のうをとけていとさよとゐ
そらてなきさせぬつかるて
またつかなこそすみてなれ
なまめけるいて命の短さな
きむしのさかなるへきかな
まれてなきなかなるにけ
き野のもとすゞしきあれ
もいとつくてくさわかしてよ
なんのもかよそかしくこころ
やさしいとあはれなからさ
まれなるの歌へかしと

○大かたの哥　女三宮也　何となけれの色なれど
秋のハわけてうき物なる有まゝ　叙行ハ下
或秋世中の秋ハうき物と知りていとひすてゝ
ともすけハふりすてがたく下の心ハ源氏を恨
る心なり

○いかにとかや　細　源氏の詞也　鈴虫を花しらしハ
くちをしく　孟　さやうに何とてうけれども
秋をうしとハしるをしりすてかけての心也
或秘　下の心ハ源氏をうしといへどもわすれかね
の外ハ花になれてありけるといふ也

○心もて哥　源氏也　花女三宮をも虫にたとへて
草のやどりハ此世をいとひ給ふ心也

○きんの御こと　細　琴をハ源氏よりひき給ふ人の心
とゞめてこと給ふ也殊勝とうち

○月さし出て　弄　さきの詞に月のおもしろく
なりとあり

おほかたの秋をばうしと知り
にしをふりすてがたきすゞ虫
のこゑとしのびやかにのたまへ
るいとなまめいてあてにおほどかなり。
いかにとかやいでおもひのほ
かなる御ことばにこそとて
こゝろもて草のやどりをいとへ
どもなほすゞむしのこゑぞふり
せぬなどきこえ給ひてきんの御こと
めしてめづらしくひき給ふ。宮は
ずゞをこたり給ひて御ことを
こゝろいれ給へり。月さし出て

○あはれなる空を　孟　感をとりよほせる也
○世中さまざま　孟　源氏の心也
○きいらりと　弄　逸者其聲樂　可引や
○こよひハ例の　孟　八月十五夜なれハ也
○兵部卿宮　孟　螢の兵部卿也
○大将の君　弄　夕霧も人く具して参りたる也
○こなたに　弄　女三宮の御かた也
○いとつきしくて　弄　源氏の詞

いとはなやかなるほどもあはれ
なるにそらをうちながめて。
世中さまざまにつけてはかなく
うつりかはるありさまもおぼし
つゞけられて。例よりもあはれ
なるねにかきならし給ふ。こよひ
は例の御あそびにやあらんとて
おしはかりて兵部卿の宮わたり
給へり。大将の君殿上人のさる
べきなどぐしてまゐり給へれば。
こなたにおはしますと御ことの音
をたづねてやがてまゐり給ひと

○久しく絶たる盃 此上のまとひ又ハ廿三宮のみす又法すゝむるとこれ
○ひとりごとを 或抄 源氏のこんれ事をとるにて まかりありける也
○うちのあそびへ 河 延喜の御時八月十五夜弘徽殿の萩さきて蔵人所のものどもに月のえんし侍りけるときの哥 拾遺にあり
也抄 内の御あそびとありけるゆへ不知也
○ゆめのまろ 也抄 批判也

つゞきてわざとあらじかれ
なくとぞくさえんまうら
めづらしきやのこゑかぜは
おりつゝなびくとにしと
おぼひさまひたりてもやも
ふすこゑなしうらのそはさ
あり給ふらのおもてまちに
月のえんまゐりつるとおぼし
てさうしるつまごのかん
まんでまかりみとゆるへて
こまゐれまゐらせうもまう
ぬるじのあるはさいあそばし

○月くらうひの河 それも月見ぬ秋ハなきよをとおもひてこそいれわすれしきかゞ 或抄 源氏の詞
○こよひのあはれなる 河 三五夜中新月色二千里外故人心 楽天
○よろ世の外まで 也抄 二千里外の心也
○故権大納言 弄 柏木也 私あはれなるさいありのたまひに引寄可然也
○花鳥の色ねを 或抄 柏木ハ物の感情もありしよ

てかくものゝあはれつきあかれ
せくゆくるさかゞみ月なる
よひのうてもあはあはれなる
ぬおもひむせびにとひのわ
たる月のいろすゞしきにほど
世のかぎりそれぞれおもひなごり
さゝれ花鳥のあるまのゆかし
まもかなしうつもでいで思ふ
るくしゆかしかりそめでて
もおもひよのまかひせなら
こうてそれ花鳥のいろも
あるのもありひとならへいふらひ

○いとうさうし　弄　麗也

○ろうも　盂　俗氏も也

○ろくものうつり　弄　廿三宮柏木のるとき物やすり

○ろくろくの也抄　此ハ遺言よりあり　めも

○うゐかわひの或抄　物語の地也

○うちうちうと　也抄　主上も物りめとも

○をむしのえん　也抄　無古事也　て出の批判

のうそあしらくんと

○こせんのかわひ　細　是よりハ冷泉院よりはせ

ると有ども注よ草子地よりのもり　左大弁ハ紅梅

の六臣式部太輔ハ系圖よりと

○うくさうろう　或抄　此人ハ冷泉院（まつりて

夕霧も六条院よりまつりとりとる也

○雲のうへと青　冷泉院也　細院ろそまつりまつ

也物ろとれすろとハ月ハ月とれ心あり

○ものすくハと　河あてろの月く花とものすくハ

心ろれくんよりなてくや

細ものすくハ俗氏よりまつりとへ

○ものよりの盃　俗氏の行也ものくしりみて

卑下九心と九の

○今ハのてやうよ　或抄　ありのかわひれハ雨ろと

あろうこのいとうさうしあ

をうどのおひてぐうもさ

あくせろくんの世をのるうも

神あてしおつぶとものうちも

ぶとうどめてやうおろんさ

ろこの物ろうよ物ぐし

うぐうろれあうびのぐうこ

まづひくうるどもぐ

しあろうこひいどじのえん

うそあしてんぐのおくん

はうをうさうすばうまつう

よ世界ろうせうこと

物ろうこのかわひうびうはうまり

めうをうちうおしうりて花宴行

ある物ろ懸ろうんぐうりめうそ

きうぐうまつうれば右ぐ

ハ六条院よりぐうひおうぐき

めてうりうり

○雲のうへとうひるなら梅も

物ろうこの秋の和の月ぐ

うろうやすおくはうたう

ぶせたものぐうものうぐ

うろうの海のぐやうおります

よりうろうこうもあうさく

○かいつさきなる　或抄　冷泉院のおりのこと

○月なをハ哥　俊氏也　河　心なくは外の月とも見てし
なる我宿なれ哀なること
弄　ハ返しの心歟也俊氏卑下の心と見ゆ又別の
心あるべしや可尋　冷泉院の山位とさうまーませ
ととあるべしハ光と云心もあるべしや
○こゝなるべし　巴抄　哥の批判也草子地也

○ろくしとゝなる　河　録寂無二
○くしの山車　孟　官位次第也

なきをとゝなるまことにあはれ
わまりてぜんとうをおもひ
こゝろぜんとうをおもひ
ぜんとうをそなはるべき
なれどまつはれんこと

月げいはるかにみるよりこし
ちぐるまのこゝろのはてをしら
てこゝろこゝろのまとをこゝ
いの海の所わうこの海のおもひ
ちとこゝろまこゝろのうしはつ
こゝろさはてこゝろをあはし
人の所車しだのまきり
ちとしの家のこゝろこゝて

○おろかなりつるにあるべし細とゝしりのこゝろこゝて
あるさんとあるべしとゝ俄まいりあるる也

○花歩　家宰相細　致仕大臣の子也系圖ゆるきとし
の説もあり

○うるとゝこゝて　孟　各直衣也

○下ゝるゆハゝり　巴抄　俊氏ハゝり下襲と着ゝ
孟　直衣布袴とゝるの也
河　直衣布袴事　西宮抄云上臈者直衣下着
下襲随便不常束也

○笛こゝて　弄　車のうしろこゝて吹也

○うるてうくさ　弄　俊氏のさをとかしる也

しづるるつるにあるべしまぎれ
いぞまひあるおんの所ゝ海よ
見こゝるおんれ見所あるべ
ゝるまゝ
おるこゝてゝるゝにあれ
むどゝるしばこゝてゝ
りゝるこゝ
あるゝるゝゝるゝ人
べ笛こゝるこゝるこゝを
ゝひるこゝて
まゝのこゝるこゝるこゝる
こゝるこゝるこゝるこゝ

○りうてんよ　五　冷泉院と源氏とをひよ厳重也

○こくさよ　五　淺官の時はやうこく

○わひしきのい　弄　冷泉院世三歳也

○いてくことのつとと　巴抄　冷泉院と源氏とのれ
躰也

○ハアしされさうの　臥抄　冷泉院のりる也

○ろの夜れ　五十五夜のよ　草子地

○心くへなく細　さうろる世とをてもろる
住ろ心くへくと也

けさぶ〜きとはらてうこ
ろくよりけんでとはるふす
へのこ〜ぶ海よりあがりてて
こしいうぐちれやまを
うあ〜ろまとぶうは地ろ
きちちうびすあわぶ
のひはるいちいよくこと
ゆるぶいらぶさうとろ
をあをうこ〜ぶりて
しづうはあうまおれ
するみうぶのうれうぶも
うのもやまとのもうぶく

○中宮の四方よ　弄　秋好中宮也

○今ハ〜　細　源氏の行
万水冷泉院あ〜ろをあ〜ハたろる山住ろと

○るるもつる細　院号をうう〜ゆて何も
はろろと甲下の行也

ふうう〜ゆりうくのうん例の
こたうあうこいまもぶも
ろいてうんゆぶうまつど
うしてうくんぶまてうて
ハ事院ハ年よのはうはうり
ゆて山あぶうるぶやすは
今ハううづうろはとまあよ
とばくもまつあぶくるをい
ゆもれぶどうろひまて
へく。ようしあしーのあうり
うぶうをゆうやすまりう
ゆりの行へうよ。ゆうもつる

○さてとうまのくしく 万水 太上天皇をそ[illegible]ませハ
さすうろくしくハえちかのろみと

○うれうり後の 孟 我よりうろさんさん道心とこ
しかのこと
或抜 法氏よりうろさんくうく成給ふる也
柏木るものうと含ての給ふ

○せうるれうろ 孟 法氏の世とのうつてあるさ
と

○のうろんく 孟 明石姫君うものうとうの
しあうしる也

○さうさくも 細 此門ひろもうせ給へとうせ
る也悉皆我うさ安のうハ心よりもうのくと

○といのてうろう 花 秋帰宮のゆる也

○元重のへうそ 細 秋好の羽禁中うしうハ今ハ
ひううとうて六条院へもさいくよまいり給ふみと

○ありうるうるさの河 拾遺 ありやろ山へいくう
とうこ法ありうるうるさのもうろ春うる

○うんかんの河 皆人のうむさうそうのゆる
ゆうれゆうれ分といくよん
孟 女三宮うるものく發心あれハと

○うの心ゆうう 弄 中宮何うも法氏とうの人
うう出家の本意というさけしさせと

やうろう海よゆすうと世れ
とのいとうとうあうろう
ゆきうひうてこのへのべて
うう法うにうもあが
つるさのまうやうよりひ
ゆううわう海とうび
のわよりううてこうの人の
うしさり世をいうとうひ
うろうもゆあがこのうろ
のうちとゆうしうけうう
ねがうにこのものうき
げうゆうとうせうひて

○もろ大やをも 花 是ハ法氏の心和也
大衰よもすくし時ハ何いくもなるもの所やもも
あるすひ也

○れ心よまゝ也 或抄 れ心まゝなれ里居もなるゝ
さいとゝ

○さゝめるき世 細 世ろハ大りさ無常とハ誰
もをもうゝ無意趣なそハゝひてゝ

○心やとろゝき 弄 ろしあるまゝさとろ
さゝかしあるもあてろゝ

いづくゝ行しやすれげよ
はやとゞ留まて ぶろわ
ろうの所ゝまゝるもいろ
まちつをすゝをもしを今ハ
ろたとよつをてろハ所ゝろ
よまを世ゝ留ゝゆろろも
行ん云るゝをもゝひゝ
もゝてゝとろをもゝさ
人いさやゝをもひゝろる
もゝるゝゝろやとろ
べゝやるゝよつをゝゝに物ゝ
ろりひろゝゝふやゝのゝ

○ろゝろもの人ゝ 細 ゝ人ゝよろゝ人のろひゝ
ゆゝ世をいゝゝゝろひるゝもけゝといろ
ゝろゝわり
○ひゝゝしゝゝとゝゝり 世抄 何るゝゝ中宮の所ゝ人ハ
世をのゝれけゝゝゝ人の推量してゝさんゝ
意ゝゝるゝものゝゝ

○ゝろゝもゝゝ花 是ハ中宮の所心ゝ也
世抄 法氏の心ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝひけゝゝ也
○こゝゝゝゝ 細 六条ゝ息不也 昊ゝ出けゝゝ法氏ハ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○をゝゝの中ゝ 或抄 地獄のかのをゝ也

ゝけをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ゑんう 盃 四息香の執心とるとてあそぶ
よまうまとろうさと

○うのく浮ひさん 細 物のをれいひ浮るきう
まを行さと

○てうきくの花 中宮の源氏より給ふ也

○さうちうあハ 弄 物の氣なくなりて浮ハ
ねくふさるるうとと

○をれかの世扶 別しきの衰とと

○をのあるさ 花 あの世ろる也

○よういひきうせん 細 ゑうの道理をもようとき
きうせろくのとれくをはさきと

○尺つくる 細 出家すして也

○やくつろる 弄 年のつろる也

○をよさを 細 源氏の心也

○そのかのを 細 源氏の羽也

をしかのあれづりとをれ
あとうそ物のあるさこあへ
やうざうろるのつるすさをいろ
でうういひきうきん人のをとあ
をもきうて、づづにのか
のうをもさ海ゆすがみと
やうくつろよん弟ひとう
るとともあるるどうもあ
つでのあぎよ さもあばし
めづまとおつれなるをまり
あて、そのかのをうん、れなの
がをきくとうあぐ。

○あさ露の　弄　今のよを　泥洹経　亦如朝露勢不久停　蘓子曰　人生一世若朝露　愛詭於桐葉耳其而幾何豈不惑哉　後漢書

○こくそんり　河　盂蘭盆経曰落餓鬼中　目連救母生天経云　在大焦熱地獄中　二経多異

或説云　初得通眼見母生耶而墮地獄砕骨焼

虜　花　目連初て六通とえらと佛に近さとい

て又佛に親近ちゝ心もあるやその母に餓鬼道

に落さると救度せ〻ゝ盂蘭盆経もとゝり

弄　羅漢ハ佛に遠〻と也　授記に預〻ると有

○えつ世ぢ〻〻　世抄　それにハ及ひ給りと　佛と文

たてハ教ゆるゆしと被仰て盂蘭盆経を説て三千界

の聖霊を供養とゝ

○玉のゐさ〻　或抄　目連ゐ〻〻も成り物ゆに

出家し給てハ孔心のゐ〻〻

盂　これを捨給ゆハ人のゐをさ有て功徳に

て科ゐ〻〻

○やり〻さゐ心　弄　出家ハゐ〻てやり〻也

○ちゝ母ひ　弄　法氏も出家の心ありと

○ちゝ母ひ　弄　今ハちゝに世をそむくと也ちゝ

をちゝつのはゝあまりに尼にて世を用に

と母にハちゝにさ我心ありとの給也

○さてしゐ〻　世抄　二人ゐ〻〻道心のゆとゆ給せ

られとをゐ〻〻さゆ給と　草子地也

○ゆ人ハちゝ母ひて　花　六条院夜ゆをて〻〻り

給ときさ上選部ゐとゆり〻供奉ちゝ給也

○春宮の御所　幸　明石御所　夕霧もいりわたりさとなりぬるを冷泉院とぞ申すめりける也

○人々とりどり　或掃　掃除し給へきを下りる也

○院をはじめ　幸　冷泉院也

孟　冷泉院の源氏とは未會ありて此大悦とく

○れさいめんの　孟　源氏へさいくは対面のそめ

脱屣あり也

るどしまどうはしらうぐうをと

ゑみはとりつくろまつ源

まうのあ門のはわらの海の

なりぬるくいつきて此今

うひぐしもたるのまさいて

人々とかたきの海をもいづ

とゑゑやとしとやどそよ

るとこの此ゑ屋をありのまま

はとろぐいとどれてうく

あられすぐ殆しあんも考

らぐ思ひやすはひよ

はあのまれよいぐやこのやが

○中くまうて　孟　秋好中宮は里出もする平人ると

のとくうちろひておくまもと

○るるるるを　孟　何事も秋好の御満足也されとも

母御息所のるをとるもさ御也

○人のゆゑ　孟　源氏の御意見のとく人のゆゑ

さ

れるよいぐされはてぐ

ろうやとゑを海よ高ぐ

なるふかろるん中えぐ中く

まで御ともいとうあて

ぐ人の中のやうるの宴

しまるいまゑてう中く

りうもるやうよ御あび

とりまんなめぐもれうろ

やもろあうを海ぐ・ぐの

ゑやとぐろうの御とをぐ

やりてどうるひの御ろうす

ろうと人のゆゑしまは

○世中をあがめ孟　秋好の位心は世ろ外なりひさ
とゝなくあがめとゝて佛法ゝ心と入て信心を
ゝ也

○ところ心ゝ　或抄　源氏も中宮とあるゝ心ゝ位息
不のゝあゝ八ゝうをとあるひ所とゝ

まづ心ゝ位ゝ功德のゝ
をゝそゝぐゝいとゝるゝぞぐ
ゝろづゝ世中をあがとゝ
ゝさ海ゝゝまゝうゝ位ゝ
ゝゝもゝろづゝゝゝいゝぐ
ゝゝ八ゝゝゝゝゝゝ
とゝ